



No.39

UT University Forests News

科学の森ニュース

Sep 20, 2007

発行：東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林

開講「夏版 伊豆に学ぶ」

樹芸研究所

8月1日(水)～4日(土)、台風5号の直撃をまぬがれた伊豆に30名の教養学部生を迎え、全学体験ゼミ「夏版 伊豆に学ぶ」を開講しました。「人の暮らしと生態系の関わり」を基調テーマとし、現代においてほとんど忘れ去られてしまった「樹芸」体験を盛り込むゼミとしました。「樹芸」は樹に親しみ、樹を暮らしに役立て、樹を育むといったことを包含します。本ゼミでは薪炭林を題材として採り上げました。薪を作り、窯を作り、ピザを焼くという至極単純な作業から、学生自らがそれぞれの感覚で学ぶというスタイルです。バイオマスが注目を集める昨今ですが、薪炭というエネルギーが一体どういうものなのか、各人それぞれが感ずるものがあつたと思います。将来、様々な分野に活躍する若者たちに薪炭と薪炭林のことを知ってもらいたい機会となったと思います。このような講義が森林と人とのよりよい関係構築に幾ばくかでも役立つことを期待します。「伊豆に学ぶ」3部作の完結？編はじっくり構想中なので、お楽しみに。



カニ、釣れたかな？

「科学の森ニュース」のバックナンバー (PDF 形式) は東京大学科学の森教育研究センター (演習林) のホームページからダウンロードすることができます。(http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/)

公開講座「森を測る」

愛知演習林

5月30日(水)に愛知演習林と矢作川森の健康診断実行委員会との共催で公開講座「森を測る」が開催され、20名の方が参加しました。

午前中に原田裕保氏の指導のもと、参加者がそれぞれ手作りで測高器「尺蔵」を作成し、午後からヒノキ人工林で「尺蔵」を使って木の高さや直径巻尺を使って木の太さを測り、データから森の混み具合について評価してどのくらいの間伐が必要であるかを検討しました。

参加者からは「自分の作った道具で調査することができて良かった」や、「間伐実技までやりたかった」などの意見がありました。



「尺蔵」で木の高さを測る練習をしているところです

第6回大麓山ハイキング登山会

北海道演習林

今年も7月15日(日)に大麓山ハイキング登山会を富良野山岳会との共催で開催しました。過去2年は、雷注意報のため大麓山に登れませんでした。今年の天気は晴れ、山頂からのパノラマに夢を膨らませて頂上を目指しました。花には少し時期が遅めでした。それでも、リンネソウやアカモノなどが綺麗に花を咲かせていました。しかし、頂上が近づくにつれ空模様が暗転。あっという間に辺りは真っ白になって、頂上からは雄大なパノラマを楽しむことは出来ませんでした。実はこの日は、天気こそ晴れでし

たが、風が強く頂上付近には終日雲がかかっていました。山頂からの展望は残念でしたが、数少ない演習林に入る機会として、参加者の方々には楽しんで頂けたと思います。



雲の中での記念写真(大麓山頂上)

五月祭で「科学の森 BOOKS」開店

研究部

5月26日(土)と27日(日)に、東京大学第80回五月祭が本郷キャンパスで開催されました。演習林研究部では「科学の森 BOOKS」の店名で、東京大学演習林出版局から発行している14種類の本をはじめ、千葉・北海道・秩父・愛知・富士演習林からのポストカード、炭、ウダイカンバのコースター、木の実、松ぼっくりなどを販売しました。学生達のアイデアによる森の雰囲気あふれる展示のおかげもあり、子どもからお年寄りまで大変多くの方に立ち寄っていただき、たまに人だかりができることも！演習林について知っていただく良い機会になったと思います。



つい立ち寄りたくなる？森の雰囲気をかもし出した店

檜皮（ひわだ）は屋根葺き（やねぶき）資材として樹齢70年以上のヒノキから、8～10年の間隔で採取されます。定期的に採取される檜皮は文化財の修理に欠かせません。国宝と重要文化財に指定されている檜皮葺きの建造物は全国で約700棟あり、これを維持するために年間約3,500㎡の葺き替えが必要となります。これらを永続的に葺き替えていくためには、常時350,000本のヒノキを檜皮採取用として確保しておく必要があります。

近年、檜皮を採取することで樹木の成長阻害や材質悪化をもたらすのではないかとという見方が示されたことから、文化財修復用資材の安定的な確保を阻害するのではないかと懸念されています。そこで文化財の檜皮資材を採取するための剥皮（はくひ）がヒノキにとって、どのような生理的影響があるかを検証するため、福岡から千葉の間にある4カ所の大学演習林のヒノキ80本（うち対照木40本）を対象に剥皮実験を行っています。懸念されることは、急激な温度変化に対応できずに凍害を受けたり、直射日光にさらされることによる材質の変化、いわゆる「日焼け」という現象が生じたりすることです。剥皮5年後に24本（うち対照木12本）を伐倒し、年輪幅や材質（細胞数、色調等）について評価を行いました。5年を経過した時点では、年輪幅、材質ともに剥皮による影響は認められていません。



檜皮葺きの屋根（ヒノキの皮を20枚ほど重ねて敷きつめてあります）

1200年以上にわたって「檜皮葺き」という伝統技術が継承されてきたという事実は非常に重いものがあり、日本文化を守るという観点からこの実験は大きな意味を持ちます。

演習林のイベントダイジェスト

詳細はホームページをご覧ください、各演習林にお問い合わせ下さい。

5月

- 12, 15日 栃本地区の自由見学日(秩父)
- 15日 公開講座「春の散策」(樹芸)
- 26日 里親企画(秩父)
- 27日 子ども樹木博士(田無)
- 29日 秩父市立影森中学校(2年生)林間学校(秩父)

6月

- 3日 市民公開セミナー「樹海めぐり」(北海道)
- 16, 19日 大血川地区の自由見学日(秩父)
- 21日 稲毛小学校「鴨川体験」(千葉)

7月

- 9～11日 秩父第一中学校仕事発見DAY(秩父)
- 17日 大血川地区の自由見学日(秩父)
- 23日 三重中学校 特別授業(愛知)
- 26～27日 SPP(Science Partnership Program)教員研修(千葉)
- 31日～8月2日 高校生のための森と海のゼミナール(千葉)

8月

- 4, 11日 夏の森林教室(千葉)
- 4～5日 公開講座「親子で学ぼう!!森林の昆虫採集」(秩父)
- 5日 公開講座「オリジナル樹木図鑑づくり」(愛知)
- 21日 栃本地区の自由見学日(秩父)
- 26日 「森林教室」世界に一つの樹木図鑑を作ろう(田無)

9月

- 1～2日 東京大学創立130周年記念事業「東大の森へ行こう。」(秩父)
- 9日 公開講座「鳥の巣箱作りと観察」(愛知演習林)
- 29～30日 大学等地域開放事業「子ども自然塾」(北海道)

10月

- 13, 16日 栃本地区の自由見学日(秩父)
- 14日 公開講座「奥秩父の亜高山帯の森林を学ぶ」(秩父)
- 19日 天津小学校緑の教室(千葉)
- 20, 21, 27, 28日 ワサビ沢展示室特別開室(秩父)
- 27日 公開講座「木を育てる」(秩父)

11月

- 3, 4, 10, 11日 ワサビ沢展示室特別開室(秩父)
- 11日 公開講座「鳥の巣箱作りと観察」(愛知演習林)
- 18, 20日 大血川地区の自由見学日(秩父)
- 中旬～12月上旬 秋の一般公開～紅葉の猪ノ川へ～(千葉)

12月

- 8～10日 日本の森と自然を守る全国集会(愛知)
- 9日 影森祭(秩父)
- 上旬 公開講座「野鳥の巣箱をかけよう」(千葉)
- 上旬 公開講座「鳥の巣箱を作ろう!」(樹芸)

カワヨシノボリ

ハゼ科 ヨシノボリ属

学名： *Rhinogobius flumiues*

愛知演習林

愛知演習林の公開講座や環境教育で行う水生生物観察会で人気を二分するのが“サワガニ”と“カワヨシノボリ”です。カワヨシノボリは子供でもタモ網で比較的簡単に取れ、見た目もかわいいので大人気です。

日本の固有種で富士川以南の本州、四国、九州北部などに分布し、東京大学の演習林では愛知演習林でのみ見られます。食性は雑食性で付着藻類や小型の水生昆虫を主に食べています。吸盤状の腹ビレで吸い付きながら胸ビレで這ったり尾ビレをバタつかせて大きな岩や高い堰堤でも乗り越えていく、逞しいお魚です。



「網につかまっちゃった。トホホ・・・」
by カワヨシノボリ



森林棲動物の林外生活 ～房総半島のニホンジカの場合～

秩父演習林 鈴木 牧

国土の7割を森林が占める日本では、ほとんどの野生動物が森林を主な棲み家としています。しかし、彼らの生活は必ずしも森林内で完結しているわけではありません。

たとえば、千葉県房総半島のニホンジカは主に森林に棲んでいますが、餌の大部分を林道脇や放棄農耕地など林外草地の植物に頼っています。このことは、発信機をつけて追跡したシカが林外草地を好んで訪れていたことや、林縁がちな場所に棲むメスジカほど高い妊娠率を示したことなどから分かりました。森林の下層にある植物は日陰に適応しているので成長が遅く、食べられると簡単に消失して

しまいますが、林外の植物は量が多く成長が早いため、食べられてもすぐに回復します。千葉演習林近辺において、森林の下層の植生が著しく衰退しているのにシカが減らない理由は、林外の植物が十分な量の餌をシカ個体群に提供し続けているためと、筆者は考えています。

このように、野生動物の生活は森林の外の土地とも繋がっているため、管理する人間側も林外の景観を意識しなければなりません。最近ではGISやリモートセンシングの発達により、上のような調査分析はもちろん、地域の景観構造を生かした保護管理計画の策定も可能になってきています。



ニホンジカ

科学の森ニュース (UT University Forests News)

第39号 (No.39)

発行日 平成19年9月20日

〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1

発行人 下村彰男

東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林研究部

TEL 03-5841-5497 FAX 03-5841-5494

編集人 山本博一

E-mail mori2007@uf.a.u-tokyo.ac.jp